６月号　営農インフォメーション

水稲・大豆・の管理ポイント
水稲・・・今月は水管理の重要な時期になります。

大豆・・・良品質な大豆を作るには、第一に排水対策を行い、梅雨の合い間をみて
播種作業をしましょう。

水稲

①本田水管理

●分げつ期の水管理

やや浅水（水深３ｃｍ程度）で、田面を露出させないように管理します。圃場に足を踏み入れ、ガスの発生が著しい場合は、根ぐされ（根が黒くなる）を起こし生育が抑制されるため、間断（かんだん）かんがいを行い、土壌へ酸素を補給します。特に水もちの良い圃場では、還元障害により葉色が薄く分げつのとれていない圃場も見受けられます。

●溝切り・中干し

中干しは、収量に繋がらない無効分げつの抑制や、土壌に酸素を補給して根を健全にし、イネの下位節間の伸長を抑制する効果があるため、倒伏の軽減につながります。

中干しの程度は田面に軽く足跡がつき、小さいヒビ割れが入る程度で行います。長期間中干しを行うと、根が切断され養分吸収が阻害されます。また、湛水状態（水を張った状態）でないと、イネの根より土壌中のカドミウムが吸収されるため、圃場の条件にもよりますが、中干しは１週間程度にし、それ以上は行わないようにします。中干しは強制落水をせず、自然減水で行います。

※台風や強風が予想される場合は、苗痛みを軽減するため湛水管理にしてください。

【開始時期の目安】

（目標穂数を３８０～４００本／㎡とした時の中干し開始時期の目安です）

栽植密度（株／坪）	1株当たり茎数
70株	14～15本
60株	17～18本
50株	20～21本

※5 月連休田植えの場合は、6 月上中旬頃が目安になります。

【溝切りの目的】

・中干しの効果を高め、入水、排水が効率よくおこなえ収穫時までの水管理がスムーズに行えます。
・収穫期に短期間で落水でき、跡作に麦を作付する場合にも排水対策として有効活用できます。

②追肥

今月は追肥の時期です。

追肥の施用は分げつを増やすだけでなく、幼穂形成期までの栄養状態を良好に保ち、太く充実させた茎を確保するため重要です。しかし、追肥が多すぎると分げつを必要以上に増加させ、倒伏の原因になります。追肥は品種や生育状況にあわせて行い、施用後は少なくとも 5 日間は止水し、水田から窒素やりん酸の流出を抑えるようにします。

※ 追肥の施用については、全層施肥用「化成肥料 14-14-14」になります。

※ 詳しくは『令和２年産米水稲施肥設計書』を参照してください。

※ 基肥に、「楽すけ」や「これいいね」、「基肥まかせな彩」などの基肥一発肥料を施用している場合は、基本的に追肥の必要はありません。

●マルチサポート２号の施用について

近年、乳白粒や基部未熟粒が発生し、品質（等級）が低下しています。マルチサポート２号を施用すると、けい酸成分や微量要素が補給できるため、秋落ちしやすいほ場などでは品質・収量の向上が期待できます。

早生品種：６月１０日～２０日頃（コシヒカリ、キヌヒカリ）

中生品種：６月２０日～３０日頃（日本晴、秋の詩）

※根の活性剤として「ファイトアップ」投げ込み剤を出穂 45 日～30 日前頃を目途に使用いただけます。

マルチサポート２号
20kg～40kg／10a

③本田除草

5 月初旬田植えのほ場は、中期剤の使用適期となります。この中期剤にはサンパンチ１ｋｇ粒剤やザーベックス粒剤（１ｋｇ・３ｋｇ）セカンドショットＳジャンボ剤などの除草剤がありますが、対象雑草の種類により使用する除草剤が異なります。(雑草の生育ステージにより後期剤を使用する場合もあります。）除草剤を施用する場合は、各雑草の種類・葉齢を確認し、適期に散布を行います。

水持ちの悪い圃場で湛水状態が維持できない場合は、落水処理用の粒剤ならびに液剤をお勧め下さい。

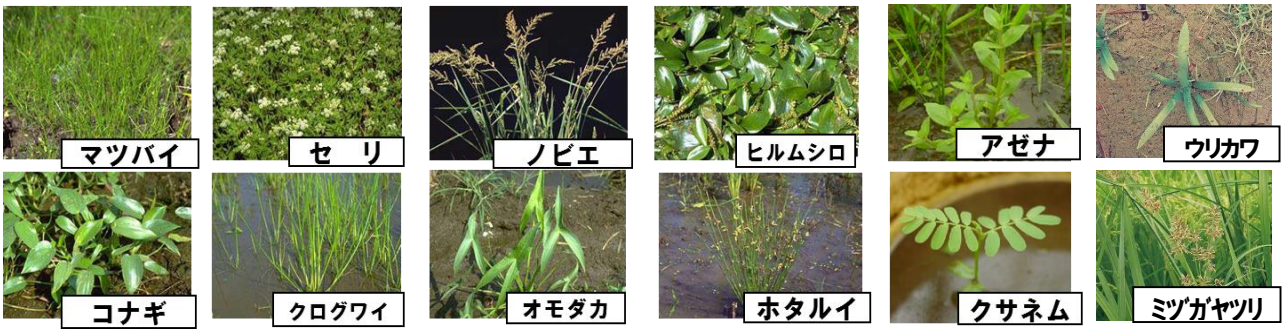
後期剤の使用については、バサグラン粒剤は落水・浅水の状態で散布します。クリンチャー粒剤は、湛水（水を張った状態）での散布となります。ただし、除草剤の収穫前日数には注意が必要です。バサグラン粒剤で 60 日前、クリンチャー粒剤で 30 日前までの使用となりますので必ず確認し、収穫前日数を守っていただくよう指導してください。

※使用剤によって落水処理、湛水処理などに分類されますので、しっかり説明をして下さい。

※環境こだわり農産物については、農薬の使用成分数が定められていますので確認ください。

※詳細については、令和２年産米水稲施肥設計書・資材申込書を確認下さい。

【主な水田雑草】



大豆

大豆の安定生産・収量の向上には根粒菌の活性化が欠かせません。根粒菌は、マメ科植物との共生により空中窒素を固定することができます。播種前の管理では、石灰の施用により土壌の酸度矯正を行うこと、排水をよくすること、土壌の窒素成分が多くならないよう『大豆専用化成』など、調整された肥料を施用することが大切です。また、土壌の pH 適正値は 6.0～6.5 なので、矯正することが重要です。

肥料名	 粒状炭酸苦土石灰	 大豆化成610
施用時期	土づくり	基肥
施用量 (10a当たり)	100kg(5袋)	30kg(2袋)

○大豆種子消毒剤

農薬名	 ベンレートT水和剤20	 キヒゲンR-2フロアブル		 クルーザーMAXX
規格	100g	200ml	1l	240ml
使用時期	播種前	播種前		播種前
使用回数	1回	1回		1回
使用方法	乾燥種子重量の 0.2～0.4%粉衣	乾燥種子1kg当たり 原液20mlを塗沫		乾燥種子1kg当たり 原液8mlを塗沫

※種子は自家採種を続けると品種特性が薄れたり、種子伝染による病害が発生する可能性があります。種子更新を必ず行いましょう。

○播種量・播種時期

雨天に播種を行うと発芽不良、除草効果が低下するため、田面がよく乾いた時期に播種を行います。

早播きは生育が旺盛になり倒伏や、つるが伸びすぎてしまうツルボケ生育になりやすく、莢(さや)着きが悪くなります。また、遅播きは生育量の不足から収量が減少するので播種作業は遅くても７月下旬には終えるようにして下さい。

品種名	播種時期	播種量
オオツル	６月中旬～６月下旬	４kg～６kg/10a
タマホマレ	６月中旬～６月下旬	４kg～６kg/10a
ことゆたかＡ１号	６月中旬～７月上旬	４kg～６kg/10a
ふくゆたか	７月上旬～７月中旬	４kg～６kg/10a

※ 播種量は圃場条件・播種時期により調整してください。